

< 2004年7月 >

『兵は凶器なり』(30)

15年戦争と新聞メディア

1935 - 1945

二・二六事件と『時事新報』の抵抗

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

戦時下の言論抵抗のなかで、これまでふれられていないのが『時事新報』の存在である。

一九三三年三月の国際連盟脱退の段階で、『朝日』『毎日』などが脱退の強硬キャンペーンを張るなかで、最後の最後まで『時事新報』が「脱退反対」を主張したことは当時の言論状況にあって壮観であった。大半が時流に流され、時局に便乗していったなかで、孤立を恐れず自説を曲げなかった。

のちの社会党委員長の鈴木茂三郎は「時事ひとり敢然と戦い抜いた。……東朝でさえ緒方局長が関西下りをやった結果、大朝と共に引っぱたかれた亀の子のようにちぢこまっていたおりから、連日の社説で最後まで主張し続けた態度は見上げて好い。

…時事はこれによってたしかに読者が一割はふえたであろうと思う」と讃えているほどだ。(1)

もともと、福沢諭吉が創刊した『時事新報』は「陸軍の政治介入や暴力的直接行動に反対する」のが社説の伝統方針であった。当時、社説だけがとりえの新聞といわれており、独立自尊、直言をはばからぬ論説は指導層からも注目されていた。

『時事新報』の見識と勇気とこの伝統は、二・二六事件でいかに発揮された。この時、四年前に起きた五・一五事件でみせた『大阪朝日』や菊竹六鼓の『福岡日日新聞』のような軍部批判はついに起きなかった。

そんななかで、『時事新報』は激しい批判ではないが、あの手この手で軍部批判を展開、しかも廃刊になるまで十ヵ月間も執拗に持続した点は高く評価できる。

二・二六事件以後の『時事新報』の社説で、軍部批判、時局批判のものは次のと

おりである。

二月二十八日	「偉大なる日本国民の沈着」
二十九日	「突発事件と財界」
三月 一日	「帝都の治安完全に回復」
三日	「子供に何と説明するか」
四日	「後継内閣と各政治勢力」
五日	「財界と後継内閣」
六日	「大命広田外相に下る」「肅軍即ち強兵」
七日	「殉職警察官に愧づ可し」
八日	「寺内大将に望む」
十日	「広田内閣漸く成る」
十二日	「人心安定の為に」
十八日	「広田内閣の政綱声明」
十九日	「青年に希望を持たせる政治」
二十二日	「暗殺沙汰を絶滅す可し」

二十六日	「高橋是清翁の国民葬」
二十七日	「肅軍の希望を与ふ」

三月末までに十七本である。これ以後も肅軍を唱え、『時事新報』が廃刊になる同年十二月二五日までに約六十本の社説で軍部、時局批判を展開した。いずれも近藤操社説部長が辞職も恐れず、体を張って書きつづけたものであった。

近藤は一九三五(昭和十)年十月に社説部長になり、廃刊まで健筆をふるった。軍部に対して齒に衣を着せず、きたんのない批判の矢を放ったが、言論圧迫はどこからもなかったという。

近藤の二・二六事件とのたたかいをふり返ってみよう。

2月26日、陸軍の発表は夜になるといい、社説は午後八時締め切りなので事件を取り扱うのは無理な情勢となった。

これだけの大事件を社説で取り上げないことを近藤は内心、じくじたる思いであった。他の新聞は取り上げないだろうか。『朝日』の緒方は書くかもしれないとの不安が去らず、翌日朝刊を見るのが怖かった、という。

二十七日朝、どの新聞も社説でこの重大事件にふれていなかった。ホッとすると同時に情けない気持ちになった。近藤は、今日こそは社説を書く決意を固めた。ところが、同日夕刻になって反乱軍が再び新聞社を襲撃するとの情報が乱れ飛んだ。

重役会が開かれたあと、松岡正男会長が近藤に「形勢が不明なので他の問題にしてくれないか」と頼んだ。近藤が拒否すると、「それなら、社説を一日休んでくれないか」と告げた。「事件の社説を今日載せないのは重役会の決定なのか」と近藤は反問した。「そうだ」。松岡会長は答えた。

「すでに決定したことなら、休むなり、他の問題にすればよい。ただ、時事の社説は時の重要問題を恐れて避けないのが独立自尊の伝統である。社説部長の職にある限り、私は決定に従うことはできない。自分は即刻、現職を辞して退職する」。近藤は断固たる口調で言った。(2)



近藤の筋の通った主張に、松岡会長が自らの非を認め、近藤に事件を思うとおり論評してくれと折れた。締め切りまであとわずか一時間しかなかった。近藤は刺激を避けるため見出しは「偉大なる日本国民の沈着」と題して二・二六事件を二十八日朝刊で取り上げた。

各紙では、『時事新報』がトップであった。『朝日』はこの日もまた見送っていた。近藤は社内の制約から解放され、かなり踏み込んで遠慮なく書き始めた。使命感に燃えた。

「偉大なる日本国民の沈着」では次のように、直接軍部への批判を避け、国民の冷静沈着をたたえ、当局の收拾を促した。

「二十六日帝都に起れる変事は、前代未聞のことである。岡田首相、高橋蔵相、斎藤

内府の如き、何れも国家の重臣にして、渡辺教育総監また陸軍部内の首脳者であるが、是等の将相、一朝にして横死を遂げ、鈴木侍従長も遭難して重傷を負いたる事件は、平和なりし六十余年の帝都に於て、絶えてなかりし大變にして、四年前大に世人を衝動したる五・一五事件、其他に比し、一層大なる椿事と称する可きものである」と前置きして、こう述べた。

「玄に甚だ心強きは、日本国民の偉大なる沈着である。国民、就中東京市民が斯く沈着しているのは、決して事態の重大性に対して無知なるが為ではないのである。… …国家の治安力に対して最後の信頼を置いている結果に外ならない。……最後に此偉大なる国民の消極的ながら曇ることなき判断あることに安心して、時局收拾に当らんことを、当局者に望む」

「帝都の治安完全に回復」（三月一日）ではさらに強い調子で軍部、反乱軍を指弾した。

「ここに最も遺憾とす可き一事は、此騒動の指揮者たる青年将校が、奉勅命令を肯んぜずして、遂に叛徒の汚名を蒙るに至ったことである。

事ここに至っては単に軍紀の紊乱者、乃至は殺人の犯罪人たるに止まらず、実に違勅の叛逆者となりしものにして、其心情動機に如何に憐む可きものありとするも、我国体に於ては断じて許す可からざる所業である。

要するに忠君の志ありて忠君の道を誤りしもの、明治初年以來わが陸軍に絶えてなかりし重大不祥事と言う所以のものはひっきょうわが日本国民の何千年来養われ来りし尊皇心に出づる所であって、之こそ外国には比類なき我国体の精華に外ならない」

三月以後も近藤の肅軍の筆は鋭くさえわたり「あんなにズケズケ言って、よく陸軍がだまっているものだ」と周囲が心配するほど齒に衣を着せず直言した。

『福岡日日』『信濃毎日』のような地方紙ではなく、東京の中央紙で、しかも十ヵ月にわたる長期の言論抵抗がこれまでの新聞史のなかで正当に位置づけられていないのが不思議なほどである。

事件は社会を震撼させた。二・二六事件によって殺された重臣と襲った軍人といったいどちらが悪いのか、子どもに聞かれて大人が言葉に窮したケースもたびたびあった。こうした質問にあった小学校教員の困惑を紹介した、「子供に何と説明するか」（三月三日）では

「叛徒として、其罪の糾弾す可き所以を、少国民に説くのが、学校及び家庭に於ける、教育者たるものの任務でなければならない」と主張。「事件に驚きたる世間には、未だこの種の論は盛ならざれども、必しも陸軍の勢威を憚っていわないのではあるまい」と皮肉った。

この社説は相当反響をよび議会の質問にも引用された。

「肅軍即ち強兵」(三月六日)では「外戦に当る可き兵力武器が、内政上の異論圧迫に向けられては、一国の治安が到底保たるを得ない」と二・二六事件を批判する一方、その原因は陸軍内の下剋上の風潮だと決めつけた。

「近年下剋上の風は社会各方面に亘っているが、本来上下の命令服従関係に依りて、紀律統制を保つ軍部内に、社会の此悪風潮が侵入するに至っては、危険これよりも大なるはない」

「殉職警察官に悦ぶ可し」(三月七日)では二・二六事件で職務を守り殉職した警察官に同情が集まり、弔慰金が殺到した点を取り上げ、政治家、官僚、軍人、新聞人らはこの警察官のように責任を十分果たしたのか、と自らを含めてきびしく問いつめている。

「今回の不祥事の如きも、其原因を究むれば、責任観念の緩慢と、之を遂行する勇氣の不足に歸し得るが如し。軍部の首脳者が夙に此点に於てシツカリしていたならば、椿事を未然に防ぐことは必ずしも絶望ではなかつたであろう」

そして返す刀で、新聞の勇氣のなさを批判「民意の代弁機関にして、威武に屈せざる気概を示していたならば、或は余ほど違った現象が現われたかも知れない」とし、

“言論の責任を分担する我輩も、また殉職警察官の英霊に対して慙愧に堪えないと自己批判した。

最初、恐る恐るだった近藤部長の筆はさえわたり以後はますます縦横無尽に斬りまくった。

近藤がズバズバ社説を書き始めると、社内では「あんな勝手なことを書いている社説部は少人数だから、襲撃があってもすぐ逃げられるが、編集局の人間はどんな損害を蒙るかも知れない」とカゲロさえ何度か出た。

しかし、近藤は一步も引かなかった。(3)

広田内閣が怪文書の取り締まりに乗りだした点を、「人心安定の為に - 怪文書取締」(三月十二日)で取り上げ、反乱鎮定後、二週間たっても事件の正確な詳報が発表されない点が、情報に餓えた国民の間に怪文書を横行させる原因として、次のように述べた。

「浮説怪文書の取締の如きは抑々末であって、寧ろ確説正文書に依りドシドシ真相を伝え得る状態の恢復を、急がなければならない。

.....蓋し今回の不祥事の如きも、実に国民の報道言論の自由が、余に制限せられたる社会に醗酵されたものであって、之に懲りることなく再び国民を無告の状態に追い込むならば、其結果は一層恐る可きものである」

軍部批判については、他紙も肅軍を主張したが、『時事新報』のように執拗に反復力説したものはなかった。

「寺内大将に望む」(三月八日)では寺内大将を適任ともち上げながら「現在確実なる収入を得、中年に退職しても余生は恩給の保証ある将校の生活は、一般国民生活の標準より判断すれば、確に平均以上である。.....国民大衆中に将校の生活を羨むものの少なからざることを、記憶せねばならない」とクギをさした。

「青年に希望を持たせる政治」(三月十九日)では陸軍の青年将校は全国の青年人口の千分の一以下であり、不平を持った青年は軍人だけではないと指摘「政府が『青年』よりも『将校』の名に驚いて、陸軍側の要求にのみ盲従していたのでは、決して全日本の全青年に希望を持たせる政治と称することはできないであろう」と主張した。

これに対して、戒厳令司令部新聞班から注意があり「青年将校は刺激的なので次版訂正せよ」と命ぜられた。二・二六事件以後、近藤が執筆した社説のなかで、注意があったのはこの一件だけであった。(4)

二・二六事件で無残な死を遂げた高橋是清に対しては国民の哀惜が大きかったが

「高橋是清翁の国民葬」(三月二十六日)では高橋を評価し、返す刀で陸軍を批判した。

「近年軍事費が膨張して財政を圧迫しつつあるのに、一般国民に対する陸軍方面よりの政治的圧力に博って、官民ともに此問題に対する批評を遠慮していた中に、独り率直なる忠言を敢てするものは、高橋蔵相一人であるかの如き観があった」と。

手をかえ、品をかえての肅軍、軍部批判のねばり強さは当時の『朝日』『毎日』と比べれば際立った。

「肅軍の希望を与ふ」(三月二十七日)では、地方長官会議での寺内陸相の肅軍の覚悟を評価しながらも、一方では「陸軍全体としても個々の将校としても、近年動もすれば部外より驕慢と誤解さるるが如き態度を、今後大いに慎むことに外ならない」とズバリと述べた。

つづいて、軍司令官師団長会議での寺内陸相の肅軍論を取り上げた「陸軍の本分に帰る努力」(四月九日)でも「近年、殊に荒木陸相以来の陸軍は、軍紀に於て一種の変態に在ったことを掩い難い。……弛緩せる軍紀を振肅するには、従来 of 優柔不断なる首脳部の態度を一掃する必要がある」と指摘した。

軍部批判の矢は在京軍人会にも向けられた。

在郷軍人会、正式名称は帝国在郷軍人会(会員・予備役約三百万人)は当時、最大の圧力団体であった。軍部と一体となって在郷軍人会は暗躍し菊竹六鼓や桐生悠々の軍部批判に対し、『福日』や『信毎』に圧力をかけたり、不買運動を起こしたことはよく知られている。

一九三六年九月十八日、それまで一個の私的機関であった帝国在郷軍人会は公的機関に改められ、陸海軍両大臣の監督下に入るようになった。

この問題を取り上げたのは『時事新報』だけであったが、「在郷軍人会の新統制」(九月二十二日)で次のように批判して注目された。

「近年の所謂非常時に入りて、軍部の発言権が各方面に重きを成すや、動もすれば其分をこえたる言動に及んで、密に一般国民より鬻蹙(ひんしゆく)される軍人も少なくなかったが、其中には予備軍人の団体的行動もあったのであるから、肅軍を徹底せ

んとすれば、当然この方面にまで及ばざるを得ないであろう」と指摘、

在郷軍人会は「背後の威光と団結的勢力を濫用して、或は政治的行動に出で、或は無事の国民を非愛国者呼ばわりして、人心を刺激するものが輩出するのでは、却って一般国民の反感を挑発して、所謂軍民離間的悪影響を生ずることなきを保し難い」

広田内閣は陸海軍大臣の現役制などを復活したり、陸軍部内から出された議会制度改革に対しても、終始ふり回されたが、これも取り上げて厳しく批判した。

「国民は横暴なるものを憎む」（十一月十八日）では横暴なる議会は選挙によってチェック可能だが「文武官僚に依る専制政治の横暴と弊害とに対しては、合法的に国民の力に依りて之を救済する手段はない」と指摘、「帝国憲法を蹂躪する不逞思想に対しては、全国民を挙げて排撃せねばならない」と主張、これを許し、逆にシッポをふる『朝日』『毎日』などの新聞の姿勢も批判した。

「近年わが国に行わるる政治論は、時局の悪影響を受けて甚しく歪曲され、軍部官僚に対しては不必要の程度まで阿諛迎合の言を陳ね、政党に対しては不当に非難攻撃を浴せる悪癖がある。……五・一五事件乃至二・二六事件に於て、何者かに脅かされたる世間の所謂識者もしくは大言論機関なるものの所論が、一向に当てにならざることは概ね此類である」

『時事新報』が終刊になったのは三六年十二月二十五日だが、末期になると筆はいよいよさえわたり、同業の新聞に対する批判、警告の内容がふえた。

「議会政治と言論機関」（十二月四日）では、新聞の責任を真正面から問うている。

「五・一五事件以来、言論報道機関の不必要なる遠慮と、軍部内の反動的革新論に対する無用の媚態とが、二・二六事件を追出する一大原因たりし。今春の不祥事件以後今日に至るも尚を、言論機関の事大主義は多く改まらず、文武官僚に阿諛迎合することに依りて、何か營業的利益にでも有りつくことを目論んでいる」

「わが国内の不安は、一部陸軍将校の無遠慮なる言動に基く所少なくないが、斯くの如き弊風を馴致して軍部を誤る罪のうち、相当の部分は新聞雑誌の事大主義的迎合謳歌に在る」と。

結局、十ヵ月間の中に戒厳司令部の新聞班からの注意はわずか一回だけで、それ

まであった右翼や軍人団体からの言論脅迫もピタリとやんで、まるで拍子抜けの感じさえあった、という。

近藤は次のように回想している。

「反乱軍はもちろん、その鎮定後も最初のころは、いつ襲撃されるか、逮捕されるかわからないと覚悟して、毎日家を出たものであった。

その覚悟も、重役会や社内幹部の心配も結局、杞憂に終わった。ただ当時、言論は事実かなり自由なのに、なぜもっと強く軍部を批判しないかと、筆者は不思議に堪えなかった。

要するに社説担当者も新聞経営者も、身辺や事業の安全だけを考えて、軍部の暴走を阻止すべき言論機関の使命を軽視した結果といわれても致し方ないだろう」(5)

十二月二十五日の終刊の日、近藤は「筆を擱(お)くに当りて」でも

「時事新報なき間の我言論界に於て、従来新報の負担せる言論的使命を継承分担し、日本全体としての民論の權威をますます高むるに至らんことは、筆を擱くに当り同業の言論機関に対して、我輩の切に懇喝する点である」と切々と訴えており、新聞の奮起を促した。

しかし、すでにそんな気概のある新聞は『時事新報』以外にはなかったのである。

重臣の一人、若槻礼次郎は『時事』の社説が失われることを大変惜しんだという。それほど骨のある社説が消えていたのである。

『朝日』も沈黙して、軍部批判できなかった。

緒方竹虎は近藤にその後会った際、「二・二六事件当時、時事はよく書いた」と近藤が赤面するほど激賞した。

そして、「自分も大いに書きたかったが、何分大世帯で差し障りが多く、思うにまかせなかった」とくやしそうに話した、という。(6)

この時、『朝日』の発行部数は約二百万部に対し、『時事新報』は約二十万部と十分

の一であった。

しかも、経営の基盤からいえば、『朝日』の磐石な経営に対し、『時事』こそ深刻な経営危機がつづき、『東京日日』に吸収合併されてしまう段階である。

緒方の弁解が単なる言いわけにすぎず、近藤が社説で何度も指摘した言論の使命の自覚の欠如、勇気のなさ以外の何ものでもなかったのではあるまいか。

近藤は結論として、こう書いている。

「二・二六事件の体験によると、時事社説のような態度が、当時の新聞界の例外でなく、各紙が筆をそろえて批判直言したならば、軍部や革新官僚に対する抑制効果は必ずあったに違いないと思う。非常時でもやれば出来たことであった。しかるに新聞は萎縮して、その言論責任を果たさなかった。昭和前半の新聞には、軍部を抑制する努力を怠った点で、亡国的戦争に突入した連帯責任があると、断言する理由はそこにある」(7)

(つづく)

<参考引用文献>

- (1) 『新聞批判』 S・C 大畑書店 一九三三年刊 185 - 187P
- (2) 「銃剣に抵抗した新聞社説 - 二・二六事件と時事新報の体験」九六六年八月号
近藤操 総合ジャーナリズム研究 1966年8月号
- (3) 「同上」
- (4) 「同上」
- (5) 「同上」
- (6) 「同上」
- (7) 「同上」